

# 幼児間における強い身体接触の研究動向と研究課題

渡邊 拓真

愛知教育大学大学院教育学研究科 発達教育科学専攻幼児教育領域

## A Review of Research on Hard Physical Contact among Young Children

Takuma WATANABE

Graduate student, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

### 1. 問題の所在と目的

幼児が集団生活を営む保育現場では、幼児間のかかわりにおいて身体接触を用いる場面がみられる。友達と手をつないで遊びに出かけたり、相手を抱きしめて好意や喜びを表現したりするような姿は、周囲の者から微笑ましい姿として温かく見守られる。そのような、幼児が日常的に用いる身体接触の中でも、相手を叩く、引っ張る、押すなどの行為をもって、他者に対して「強く」身体を用いて接触するような幼児の姿も散見される。例えば相手の行為や発言に対して怒りを露わにして相手を叩く、遊具を使用している相手を押し退けて奪おうとするなどの行為は、相手に対して否定的な意図をもって「強い身体接触」を用いてかかわる場面として捉えられるものだろう。一方で、他者に対して笑顔で叩いたり、引っ張り合って倒れ込み笑い合ったりするような場面も、強く身体を用いて接触する行為である。本稿では、このような叩く、押す、引っ張るなど、強く身体を用いることで他者とかかわろうとする行為を「強い身体接触」と名辞する。

保育者であれば、そのように幼児が相手に対して強い身体接触を用いる場面に遭遇したとき、そのかかわりを見守るべきか、介入して制するべきか悩んだ経験があるだろう。そもそも幼児が強い身体接触を用いて他者に対してかかわろうとする時、そのような場面を目撃した保育者は、なぜ見守るのではなく、その行為を制止することがあるのだろうか。その原因の1つに、幼児が用いる叩く、押す、引っ張る、というような身体を用いる行為を攻撃行動として捉えている可能性が考えられる。大淵<sup>1)</sup>は自身の研究を行う上で攻撃の基本的概念として、攻撃を「他者に対して有害な刺激を与えようと試みる行動」と定義し、攻撃が「他者への有害な効果を伴う行動である」という点が含まれると

説明している。保育者が幼児の強い身体接触を目撃したとき、このような攻撃行動のもつ一側面がイメージとして浮かび上がることから、幼児の行為を否定的に捉えてしまうのではないだろうか。

しかし強く身体を用いる行為は、攻撃行動に見られるような他者に対して有害な効果を伴うようなものばかりではない。例えば保育現場では、幼児同士が笑みを浮かべながら相手を強く掴み、揉み合いながら倒れ込み大きな声で笑い合うという場面が見られる。このような他者とじゃれ合うような行為について、Pellegrini,A.D.<sup>2)</sup>は「じゃれ合い遊び (rough and tumble play)」は多面的で、もの遊びや身体を動かす遊び、社会的遊びの特徴をもち、主には社会的遊びであることを主張している。Pellegrini,A.D.が主張するように、実践現場においても、子どもが遊びの中で強い力で身体を用いてじゃれ合う場面が散見される。

また登園してきた友達に対して挨拶をするのではなく、笑いながら背中を叩いて走り去るといったような、強く身体を用いて相手に接触する行為もみられる。この身体接触は遊びではないものの、相手を否定するために用いられたものではなく、挨拶の代わりや、相手とのかかわりのきっかけとして用いられたと捉えられる。また、ふざけながらちょっかいをかけるようにして相手を叩くことが、その後のかかわりの起点となったり、互いに掴みあって引っ張り合うような行為によってかかわりを展開させたりするなどの場面もみられる。しかし実際の保育現場で散見される強い身体接触には、他者の行為や発言に対して怒りを露わにして相手を叩くような行為によって、トラブルとなる場面も見られる。越中・新見・淡野・松田・前田<sup>3)</sup>の研究によると、4種類の攻撃場面を紙芝居にしたものを提示して幼児に見せたところ、4歳未満の幼児は動機や目

的にかかわらず全ての攻撃行動を悪いと判断し、4歳以上の幼児はいずれの攻撃行動についてもある程度許容していたと述べている。

このように幼児期は、他者が強い身体接触として用いる、叩く、引っ張るなどの行為に対して、それが攻撃行動であるのか否かの理解が発達する時期であるともいえる。筆者が保育現場で幼児を対象に行った観察においても、強い身体接触は身体を積極的に用いて他者とかかわろうとする手段としても捉えられており、強い身体接触が幼児間のかかわりにおいて意味をもつと考える。また保育者自身が、幼児が用いる身体接触行為の意図を把握することで、幼児に対して適切な対応が可能となることが考えられる。

幼児間で強い身体接触を用いることは、先にも述べたように、相手とトラブルになることも想定される。幼児間のトラブルは、幼児の発達の・教育的な意義があることが示されている<sup>4)5)</sup>が、保育現場においては、そのようなトラブルに対して、実際どこまで保育者が見守ることができているだろうか。

保育現場でトラブルを見守ることが難しい要因は、幼児のトラブルが、保護者間や園とのトラブルに発展する可能性を秘めていることにありと考える。保育者は、保育を円滑に行うためにも、保護者同士や保護者と保育者との関係を良好に保つことに意識を置いている。そのため幼児間におけるトラブルを避けようという意識が生まれることが考えられる。また、保育者がトラブルを教育的な意義をもつものとして捉えたとしても、保護者がそのことに理解を示すとは限らず、幼児間におけるトラブルに対して、教育現場では難しい対応に迫られることも少なくないだろう。

実際に保育現場で用いられる幼児間の身体接触は、一方では他者に対して友好的に用いられるが、他方では敵対的に用いられることもある両価的なものであると考えられる。そのような幼児が用いる身体接触の中でも、強い身体接触に焦点を当てて研究することによって、一見すると他児に対して否定的に用いたとみられる行為においても、幼児間のかかわりにおいて価値のあるものとして捉えられる可能性がある。

そこで本稿において、身体接触に関連する先行研究をもとに研究動向を俯瞰することによって整理し、身体についての理解を深め、幼児間の強い身体接触における今後の研究課題を示すことを目的とする。

## 2. 身体に関連する用語の整理

### (1) 身体

「身体」とは、文字通り人の「からだ」を指すものであるが、一般的に「からだ」は「体」とも表記される。この二つを区別すると、「体」とは動物の頭・胴・

手足などのすべてをまとめていう語<sup>6)</sup>であり、「身体」とは人のからだを指すものである。また「身」という文字は「身が引き締まる」「身に染みる」などと、精神的な変化を表す意味として使われる。そのため「身体」と表記した場合、人体としての「からだ」だけではなく、精神や心を含めた「からだ」としての意味をもつと捉えられる。また、精神や心と「からだ」の関係には、心身一如という言葉で表されるように、肉体と精神は一体のものであり、分けることができないものであるという捉え方もみられる。このことから、人と人が接触することにおいては、単純なからだ同士の接触に留まらず、精神や心にも影響を及ぼすことが考えられる。そのため、幼児間に見られる「からだ」を用いて他者と接触する行為においても、心と密接に関係するものであるため「体」ではなく「身体」を用いることが妥当であると考えられる。

### (2) 身体と心

前節で「身体」に視点を当てたことにより、身体を理解するためには、身体と心の関係に着目する必要があると考えられた。そのため、心身論の先駆けであるデカルトとメルロ＝ポンティの哲学について触れる。

デカルト<sup>7)</sup>は心(精神)と身体(物体)は別のものであるとし、「心身二元論」という考えを示した。デカルトは「私は身体をもっており、これが私ときわめて密接にむすびついているにしても、しかし私は、一方で、私がただ思惟するものであつて延長をもつものではないかぎりにおいて、私自身の明晰で判明な観念をもっているのであるから、私が私の身体から実際にわかれたたものであり、身体なしに存在しうることは確かである」と述べている。物体としての身体が減んでも、心はそのまま存在し続けるという考えから、デカルトはこのような理論を展開したが、心と身体がどのように作用しあっているのか、という点において明確な説はみられない。

一方、メルロ＝ポンティ<sup>8)</sup>は、身体論の中で、「身体の永続性」「身体の二重感覚」「感情的空間としての身体」「身体運動感覚」という身体の4つの特徴をあげている。メルロ＝ポンティが「身体の永続性」で記しているように、人は普段自分の身体を常に意識しているわけではなく、それは意識の背後に隠れているようなものである。ではどのようなときに、人は自身の身体を意識するのだろうか。それは他者の身体に触れたり、他者から触れられたりしたときであろう。このように考えると、人は他者との身体接触を通して他者を感じて意識し、また自分を感じて意識するといえる。換言すれば主観と客観の両面を、身体接触を通して理解していくといえる。またメルロ＝ポンティは身体運動感覚の説明の中で「私はそれ(自分自身の身体)を探し

出す必要はなく、それはもうすでに私と一体となっている」と述べており、すなわち身体は意識と一体であるとしている。

デカルトの心身二元論に触れ、メルロ＝ポンティの身体論を読み解くと、心と身体は分けられない、一体であるものとして考えることが適切であると考えられる。このことから身体接触によって得られるものは、単に身体が受け取る刺激に止まらず、精神的な心の理解でもあるということがいえる。

身体と心の関係については、ジェームズ<sup>9)</sup>も、大変興味深い指摘をしている。「われわれがこれらの粗大情動について考えるとき、自然な考え方は、ある事実の心的知覚が情動と呼ばれる心的感動を喚起し、この心の状態が身体的表出を惹き起こすと考えることである。私の説はこれに反して、身体的変化は刺激を与える事実の近くの直後に起こり、この変化の起こっているときのこれに対する感じがすなわち情動であるというものである」「われわれは泣くから悲しい、殴るから怒る、震えるから恐ろしい、ということであって、悲しいから泣き、怒るから殴り、恐ろしいから震えるのではないというのである。」

このようにジェームズは、私たちが常識的には心が感じた後に身体が動くと考えているような順序ではなく、身体が動く（反応する）から感情が起こるというのである。換言すれば、感情や情動は身体的な変化や身体感覚がなければ存在しないというのである。この説の正否はさておき、心と身体には現代においても完全に把握しきれない未知なる部分があり、両者の関係は完全に区別して考えられないものと言えるだろう。

また春木<sup>10)</sup>は、著書の中で動きから心を考える立場に立ち、心と身体について論じている。幼児期における養育者との身体接触が、後の接触感に影響を与えることが示唆されており、身体接触は人間の絆の中核をなしていると述べている。

このように心と身体は互いに影響し合い、それはどちらが先に影響を与えるというわけではなく、どちらからも起こるものといえるだろう。それゆえに、身体接触において心と身体を別のものと区別せずに捉えることが重要であり、またそれぞれに作用し合うと解釈する必要があると考える。

### (3) 身体と脳

これまでに身体と心が影響し合う関係にあることが理解できたが、一方で身体と脳に着目した研究も存在する。

身体と脳の関係にも視点を当てると、養老<sup>11)</sup>は、人の活動を脳と呼ばれる器官の法則性という観点から、全般的に眺めようとする立場を「唯脳論」と呼び、脳と心、身体との関係について説いている。養老は、脳

は「構造」であり心は「機能」とありとし、脳と心の関係は、心臓と循環、腎臓と排泄、肺と呼吸の関係と似たようなものであり、心は脳の機能である、としている。しかし心には他の臓器にはない「意識」という特殊性があり、この機能的特性のために、人は心を特別に扱ってきたとし、デカルトの心身二元論の出発点もここにあるという。さらに養老は、脳（構造）と、心（機能）における対応関係を形態学の視点から追及している。脳と心の対応関係を、原因と結果のような時間を含んだ因果関係ではなく、時間を除いた対応関係として捉えている。すなわち、唯脳論では、「心の原因としての脳」ではなく、心の示す機能に「対応するもの」としての脳、あるいは脳という構造に対応するものとしての「心という機能」として扱っているのである。また身体と脳の関係について、身体にはいたるところに末梢神経が張りめぐらされており、脳と神経とは一連の連続する構造でありとし、明瞭に分離できないものとしている。このことから「中枢は末梢の奴隷」とありとし、この関係は身体一元論と言ってもいいとしている。

また山口<sup>12)</sup>は、皮膚は「露出した脳」「第3の脳」とありとし、脳は皮膚と同じ外胚葉から形成されるため、皮膚の一部が脳になるといえるとしている。皮膚の感覚は脳の体性感覚野で処理され、それが占める面積は脳内で非常に大きな割合であり、脳に与える影響は非常に大きいとしている。そのため東洋医学において、施術者が患者に触れることで自律神経のバランスを整えたり、オキシトシンを分泌させたりするなど自然治癒力を高め、触れること自体が患者を癒す効果をもつと述べている。

脳と身体についての研究は、人工知能においても進められており、茂木<sup>13)</sup>によると、人工知能の研究者は人間が身体を持っていることが、人間らしい知性が実現する上で大切な条件であるとみなしているとし、この「身体性」を重視すると、コンピューターが身体を持ったロボットならば人間らしい知性を実現できるのではないかと述べている。

このように、身体と心、脳はひとつの大きなまとまり、つながって関連し合うものとして捉えるべきことがわかる。心で感じたものや脳で考えたことを身体で表し、また身体を用いて相手に触れたり、触れられたりすることから心や脳に影響が表れる。そのため、身体を用いるということは、単純な接触の刺激だけにとどまらず、思いは身体を使って表現され、身体を使って他者と接触することによって、身体だけでなく思いや考えもつながり、共有されていくと捉えられる。すなわち身体を使用することは社会的な行為<sup>14)</sup>といえる。



#### （４）身体性：身体のもつ力

前節まで、身体と心や脳のかかわりについて述べてきたが、そもそも人の身体には、どのような力があるのだろうか。津守<sup>15)</sup>が「子どもは身体的行為によって人生を探索している哲学者である」と述べているように、幼児の成長とは、日々の身体的な行為によって成るといえる。身体で学ぶということに視点を当てると、諏訪<sup>16)</sup>も同様に、身体性を「知はからだがあるが故に生まれる」「からだ抜きに知を論じることはできない」と述べている。諏訪は、からだで学ぶことの意味を論じる中で、「からだで学ぶ」とは、生活との関係でわかる、自分事としてわかる、社会という実態に即してわかるという意味であるとし、教師が目指すべきは、学び手からからだで学ばせるような環境を整えることだと述べている。

学ぶこと以外にも、コミュニケーションにおいても身体は重要なものである。渡辺<sup>17)</sup>は、身体的コミュニケーションシステム「E-COSMIC」という、ロボットあるいは電子メディアを用いた支援システムの技術を用いて、身体的コミュニケーションについて述べている。その中で渡辺は、うなずきや身振りなどの身体的リズムの引き込みをメディアに導入することで、対話者相互の身体性が共有でき、一体感が実感できると述べている。このことから人のコミュニケーションは、行為者の用いる非言語的な身体動作を認識できること、すなわち身体性を感じられることによって、受け手側が引き込まれ、成立すると捉えられる。

これらのことから、人の学びや対人コミュニケーションにおいて重要なものは身体性であることがわかる。保育現場においても、日常的な幼児間のかかわりにおいて、「からだを持ったもの同士」<sup>18)</sup>のかかわりが散見される。幼児が他者とのかかわりの中で用いる、言葉やそれ以外の様々なコミュニケーションの方略は、身体性が支えているといえる。

### ３．先行研究における身体接触の位置づけ

#### （１）身体接触

身体接触は、知的なコミュニケーションではなく情緒的なコミュニケーションの一つであるとされる<sup>19)</sup>。また大坊<sup>20)</sup>は、身体を用いて他者に触れることは、直接的に自分の存在を相手に伝える、原初的な伝達形態であると述べている。これらの主張から、身体接触が他者とコミュニケーションするための方法の一つであることが示されている。そのような身体接触の中でも、本稿では叩く、押すといった相手に対して「強く」身体を用いる行為に焦点を当てているが、一般的に身体接触に関する研究とは、強く相手と接触するイメージのない、アタッチメントやスキンシップといった親密

さを連想させるような行為に焦点を当てて行われたものが多くみられる。ここではそのような身体接触を「弱い接触」と表現し、身体接触を「弱い接触」と「強い接触」の２つに分け、身体接触のもたらす効果に着目して先行研究を俯瞰する。

#### （２）弱い接触としての身体接触の効果

まずは人が生まれて始めて身体接触を通して他者とかわることになる親子間の身体接触に着目する。ハーロウ<sup>21)</sup>は養育と慰撫の段階において、アカゲザルの母親が行う第一の義務は子どもに対して密接な身体接触を与えることだとし、この身体接触が子ども側に愛情を芽生えさせるメカニズムであるとしている。また母ザルは子ザルに接触慰撫（contact comfort）を与えると同時に子ザルからもそれを受け取る。ゆえに接触は、母親側に母性愛をかきたてる重要なメカニズムでもあるとしている。すなわち、アカゲザルは密接な接触によって母子ともに愛情を深めることが示されており、これは人にも同じような作用があると考えられている。このことから身体接触によって、行為者と受け手のどちらも影響を受けるということが示されている。それは身体接触が互いに影響を及ぼし合う非言語的な相互行為として、親子の関係性を構築するものであると捉えることができるだろう。

人が他者との関係を形成する原初的な体験は、擁護者との愛着形成にみられる。ボウルビィをはじめとして、母子間の愛着行動という観点から身体接触がもつ重要性が提唱されており、ボウルビィ<sup>22)</sup>によると愛着行動とは、他者を求め他者に接近しようとする行動である。乳児は身体接触を含む様々な関わりを通して母性的対象と愛着関係を築いていくといわれており、乳児にとって母性的対象との身体接触が重要なものであることが示されている。この愛着関係が形成されることが、その後の社会性の発達に重要な役割を果たすといわれている。

また母子間の接触に関して根ヶ山<sup>23)</sup>が、母子間の身体接触における重要な論点のいくつかはくすぐり遊びに集約されるとし、身体接触の発達過程について考察している。その中で根ヶ山は、子どもの身体への接触行動としてのくすぐり遊びでは、母子間の身体性の重なり（二項性）をベースに、その一部に両者が焦点を合わせて対象化し、同じ感覚を共有していたことになり、この二項関係の中にすでに、身体感覚の共有を下敷きにして三項関係的要素が顔をのぞかせているとしている。このような共振的な日常の間身体性は、従来言われている三項関係出現の前駆者として身体が機能している可能性を示唆している。

乳児期において母子間で身体接触が十分になされることにより、その後の社会性に大きく影響してくるこ

とが示されていることから、乳児期における身体接触の重要性が示されている。また根ヶ山が指摘するように、身体接触によって「同じ感覚を共有」したり「共振的な間身体性」を体験したりすることが起こるといふ点は着目すべきものであり、この点は幼児期にみられる幼児間の身体接触においても、同様に体験する機会があると考えられる。

このような母子間の身体接触を対象とした研究は、「愛着」や「アタッチメント」をキーワードとして多数なされている。幼少期において身体接触の機会が十分に保証されることが、その後の健全な発育に欠かせないことをモンタギュー<sup>24)</sup>が指摘するなど、身体接触を通して親密な親子間のかかわりが、1人の人間の土台を作るために必要であることが、数々の先行研究から示されている。

山口<sup>25)</sup>は、親子間の愛情は生まれながらに持ち合わせているものではなく、直接肌を触れ合わせることで愛情が芽生えたと述べている。加えて山口・山本・春木<sup>26)</sup>は、幼少期に両親から受けた身体接触量と、現在の心理的不適応との関連について検討した結果、男性は心理的不適応と両親からの身体接触量との関連は見られなかったが、女性では不適応の高い者ほど両親からの身体接触量を低く評価したことを明らかにしている。これらの研究から、身体接触が心身の成長に影響する可能性が示されており、親子間の愛着関係が身体接触を通して育まれることの重要性は疑う余地のないものである。

以上のように、親子間で用いられる身体接触によって、愛着関係といった親子関係が構築されていくことが理解できる。そのような乳児期における親子間の身体接触を土台として、人は社会の中で他者と接触するようになる。一般的に他者と身体接触を用いる際には、その関係にある程度の親密性が求められると予想されるが、他者との身体接触が許容される要因は親密性だけなのだろうか。

山口<sup>27)</sup>によると、身体接触が不安に及ぼす影響を調査した研究において、身体接触を行う2者の関係により身体接触による不安への影響は異なること、また触覚抵抗によっても影響を受けるとし、触覚抵抗が低い者は身体接触により不安が低下したのに対し、触覚抵抗が高い者は逆に高まったことを指摘している。その理由として、被験者となった初対面の女子大学生同士が自らの意思とは関係なく“10秒間肩に触れる”という軽い身体接触の実験において、欧米の握手にみられるような融合化作用が見られたのではないかと述べている。すなわち触る側と触られる側の両者において、初対面の高い触覚抵抗を低減させる機能を有したのではないかと考察している。また親密のペアで同様の

実験を行った結果、触覚抵抗が低い者は身体接触により不安が低下したが、それが高い者は不安が高まったとも述べている。このことから、親密な関係である場合に必ずしも身体接触が許容されるわけではなく、その者がもつ接触への抵抗感が、身体接触の捉え方を決定することがわかる。このことから、乳幼児期に身体接触を用いた親子間のかかわりが十分に行われることで、接触自体の抵抗感が低くなることの重要性が理解できるとともに、親密性は身体接触を許容する要因ではあるものの、必ずしも必要なものではないと捉えられる。これは看護の領域において、看護師が実際に患者に触れることによって不安を低減させることを重視している<sup>28)</sup>ことから理解できる。

一方で、親密な関係によって接触を許容するのではなく、接触することで相手に対してポジティブな印象を得るという効果が示されている。心理的特性に着目して身体接触の効果を捉えた宮島<sup>29)</sup>は、検査場面での身体接触が対人コミュニケーションに与える効果を測定することを目的とした女子大学生を対象にした研究において、身体接触が看護場面において重要なチャネルとなることが確認されたと述べている。確認された身体接触の効果として、身体接触を受ける者の心理的特性としての依存性や対人不安の程度に影響を受けるが、特に「信頼できる」という項目においては、依存性の高い群では身体接触のある場合を身体接触の無い場合よりも有意に高く評定されたとして、依存性の高い群では身体接触により対人的動揺を鎮めたのではないかと指摘している。このことから、他者による身体接触によって、相手を信頼することにつながっており、ポジティブな効果が得られていることがわかる。

当然ではあるが、身体接触がポジティブに働かないこともある。宮島は対人不安得点の低群については、身体接触がネガティブに働いたと捉える結果が示されたと述べており、身体接触のもつ2つの面を指摘している。この身体接触がもつ2面性については、親愛感の知覚における視覚・聴覚・触覚の間の優先関係を研究した松尾<sup>30)</sup>も「触覚がポジティブ-ネガティブ両面の可能性を持つ、アンビヴァレントな感覚モダリティであることが示された」と述べている。このように身体接触がもたらす効果には2面性があることが捉えられているが、他者に対して親密性や信頼感をもつ一要因となる可能性が示されている。

以上をまとめてみると、弱い接触としての身体接触がもつ効果として、親子間では身体接触が愛着関係を築くための重要なものであり、健全な発育に欠かせないものであることが理解できる。また親子間での身体接触が十分であれば、社会の中で他者との身体接触を許容するための土台となることも示されていた。その

ような他者とのかかわりにおいて用いられる身体接触は、親密性を感じる相手とのみ許容されるものではなく、身体接触によって親密性が高まるなどのポジティブな可能性が示されていた。しかし身体接触を受ける者によってはネガティブに働くこともあるため、身体接触による効果は二面性があることが示された。

### （３）強く身体を接触させることの効果

強い身体接触に見られるような、接触の強度に着目した研究がある。筒井・角山・中本・後藤<sup>31)</sup>は、身体接触を「ソフトタッチ」「ハードタッチ」に分け、ハードな身体接触について研究している。筒井らによると全力による身体接触を伴う運動は、攻撃的な感情の表出を抑制する効果があるのではないかと仮定し、小学3年生を対象として身体接触を伴う運動（組ずもう・カバディ）と身体接触を避けるように企画された運動（棒ずもう・タグカバディ）の比較授業を行っている。その結果、身体接触を伴う運動が児童の筋出力の制御力を高めるとともに、児童の身体への気づきを促し、相手の筋肉の緊張・緩和、心臓の鼓動、発汗などから、お互いが主観的に相手の気持ちを認知し、それが児童の中に実感を伴う共感的な心情を生起させ、攻撃的な感情の表出を抑制すると考えている。ゆえに「キレる」子どもの心と身体の異変の解決に寄与する一つの方法になり得るとしている。

また正木・井上・野尻<sup>32)</sup>は幼稚園における保育者と幼児の身体接触を伴う「じゃれつき遊び」に着目した研究を行っている。じゃれつき遊びは興奮した状態で行う遊びであり、保育者と幼児の間で行われる。この中には押す、引っ張る、捕まえる、しがみつくなどの激しい動きが含まれており、このじゃれつき遊びをすることで脳の前頭葉を刺激し、興奮と抑制の強さを発達させるとしている。栃木県の宇都宮市にあるさつき幼稚園では、実際にこのじゃれつき遊びを保育に取り入れて実践しており、園児には脳の興奮と抑制の強さ、バランスがよく、切り替えもスムーズな「活発型（大人型）」である子が多いとしている。

筒井らの研究では、対象が小学生であることから、授業の一場面として意図的にハードな身体接触を用いる場面を設定している。その行為はあくまで、競技や運動としてのものであり、教師が主導して児童に身体接触活動を促しているものである。一方で正木の研究に見られる「じゃれつき遊び」は、じゃれつき遊びを行う時間は保育者が設定しているものの、何をどのようにしてじゃれつくのかは、幼児が決めるものである。ただし、じゃれつき遊びは保育者や保護者とともに行うものであり、幼児間で行うものではない。幼児間における強く身体を接触させる行為について研究しているものはほとんどみられないのは、日常生活において

幼児が幼児に対して強く身体を用いて接触させることが、怪我やトラブルなどにつながるような危険を伴う行為であり、褒められるものではないという価値観が浸透しているためではないだろうか。またこれまで、幼児同士が強く身体を用いて接触する行為自体に教育的な価値を見出すことができていないことにも由来するだろう。しかし、筒井らや正木らによる小学生を対象にした研究により、強く身体を接触させることによって、攻撃的な感情の表出の抑制や、脳の興奮や抑制を促す効果が示されていることから、幼児間における強い身体接触においても、そのような効果が期待できると考えられる。

### （４）身体接触研究のまとめ

様々な身体接触研究から、身体接触の重要性が示された。身体接触とは、単純な刺激ではなく、触れることで相手を感じ、相手を認知する行為である。身体接触は、乳幼時期から存在するコミュニケーションの一つ<sup>33)</sup>であり、その中に含まれる強い身体接触も、非言語的なコミュニケーションとして捉えることができる。西<sup>34)</sup>が「言葉を越えた」とも描写される身体的なコミュニケーションは、こうした身体相互のやりとりの広がりや深まりに応じながら、自己と他者とをより直感的に繋いでいる」と述べているように、身体接触は言葉を使って相手を理解するのではなく、身体を用いることで身体、心、脳の全てで相手を感じ、読み取るのだと考えられる。もしも身体接触が乳幼児期に用いられなかった場合、親子間での愛着関係が築かれないことに加え、乳幼児期に親子間でのスキンシップが十分されていないことから、他者が用いる身体接触到抵抗を感じるなど、コミュニケーションに影響することも示された。それは社会で生活する中で、対人関係構築に影響することが危惧されるということだろう。

本稿が対象としている幼児間で用いられる強い身体接触も、これまでに述べてきたように身体、心、脳が相互に影響し合い、複合的に絡み合って発現する行為である。強い身体接触は幼児の生活の中に散見されるものであることから、幼児間においてコミュニケーションとして用いられていると推察できる。

## 4. 幼児間における身体接触を含めた相互行為

### （１）相互行為

前節において、身体接触がコミュニケーションの一つとして考えることが示された。コミュニケーションとは、伝達・通信・交信など、情報が伝えられることを指し<sup>35)</sup>、人と人とをなんらかの心的メッセージを送受して結ぶことにある。さらにコミュニケーションは大きく2つに分けられる。一つは、言語を介して互いの意図や感情の伝達を行う「言語コミュニケーション



ン」であり、一方で言語以外の手がかりを用いて行われるものを「非言語コミュニケーション」という。本稿で焦点を当てる強い身体接触は「非言語コミュニケーション」に該当するものであるが、そもそもコミュニケーションがもつ機能とは、情報の伝達だけなのであろうか。

パターンソン<sup>36)</sup>によると、非言語行動による受け手（解読者）と送り手（符号化する者）の行動はほとんど、ある意味で潜在的に情報提供行動であるとみられるため、非言語行動の最も基本的な機能は情報提供機能であるとしている。しかし前節で根ヶ山の「共有」「共振」を体験することについて示したように、鯨岡<sup>37)</sup>も非言語コミュニケーションは、一方が概念や思考をただ伝える「伝達」という意味だけではなく、受け手側の「理解」も含め、伝え手と受け手のあいだである観念や思考が「共有されている」状態といえるのではないかと指摘している。このように身体接触を通して「共有する」ということに関しては、他の研究にも同様の示唆がみられる。

菅原・野村<sup>38)</sup>は、身体的コミュニケーションの最も本質的な力は、人と人とのあいだのある種の「一体感」がかりにされ、それが「共有」される瞬間のなかにこそ立ち現れるとしている。

根ヶ山<sup>39)</sup>も、身体接触は二者間において同じ情動を共有する契機となりやすく、そのことによってある意味において間主観性の重要な舞台となっていると思われるとし、その同時共起的な相互性は、体験の「相称性」と言い換えることもできるとしている。

西<sup>40)</sup>は、身体によるインタラクティブなコミュニケーションの中でコミュニケーションにおける“互いに影響し合う関係性”に着目し、コミュニケーションには“伝達”とは別に“共有”を目指す側面があるということと、自己身体と他者身体が相互に関係するインタラクティブなコミュニケーションは“共有”を目指すコミュニケーションの際に色濃く立ち現れるとしている。また“互いに影響し合う関係性”を通じて築かれていく“心理的な一体感を伴う身体的な同期の状況”を“共振”と定義してコミュニケーションを捉えている。

これらのことから、身体接触には「伝達」と「共有」という2つのキーワードが導きだされた。身体接触という非言語コミュニケーションの機能を、行為者の意図を受け手に伝える「伝達」として捉えるだけでなく、相手と「共有」することにより互いに影響しあう相互行為であると捉えることができる。幼児間で用いられる強い身体接触においても、そのような視点から捉えることにより、強い身体接触の役割を明らかにすることが可能になると考えられる。

## （２）幼児間における身体接触

ここまで、身体接触が相手に対して意思を伝達するだけでなく、相手と心理的な一体感をもつ共有としての相互行為となりうることが示された。保育現場では、集団生活における幼児間のコミュニケーションとして、強い身体接触が用いられる。無藤<sup>41)</sup>が幼児は言葉だけでやりとりすることは少なく、身体が言葉の代わりや補足として機能していると述べているように、言語を獲得して意思伝達を行うことができるようになる幼児期においても、身体を積極的に用いて他者とかわろうとする姿がみられる。本稿では、そのような強い身体接触に焦点を当てているが、強い身体接触に限らず、幼児の身体接触に着目した研究が見られるため、強い身体接触と関連させて先行研究を俯瞰する。

まず塚崎・無藤<sup>42)</sup>は、保育現場における3歳児の身体接触の変容について調査している。その中で、幼児間で用いられた身体接触の中では「押す」「叩く」行為が最も多く発現しており、次に手を繋ぐ行為が多くみられたという。「押す」「叩く」といった身体接触は、本稿が焦点を当てる強い身体接触においても、多く発現すると予測される行為である。さらに幼児が用いた身体接触行為の意味と身体の動きとの関係を分析した結果、「押す」「抱く」「叩く」行為がすべての意味（親和的・中立的・否定的・偶発的・不明）において使われているとしている。「押す」「叩く」といった身体接触が、相手を否定するだけではなく、親和的な意味をもつことが示されているため、一見すると攻撃的に見えることのある強い身体接触においても、同様の意味として用いられる行為が存在することが考えられる。

また藤田<sup>43)</sup>は3歳児から5歳児に見られる身体接触を縦断的に観察し、年齢間の差異を統計的に比較し、5歳児が様々なタイプの身体接触を複合的に、巧みに用いて相互にかかわり遊び、暗黙的に戦略的、かつ道具的、手段的に用いているとしている。藤田の研究から、幼児が身体接触を用いることには年齢的、発達的に特徴があることが示されている。強い身体接触においても、同じ「叩く」「押す」という身体接触であっても、年齢や発達によって、異なる用いられ方をすることが考えられる。

これらの研究から、幼児が身体接触を巧みに用いて他者とかわろうとしている姿が示されており、それは幼児が他者との関係を構築したり、展開したりするために身体接触を用いていると捉えることができる。

## （３）強い身体接触に関連した先行研究

幼児間の身体接触を直接扱った研究ではないが、ふざけやおどけ、からかいなど、強い身体接触と同様に、一見すると推奨されないような幼児間の行為に着目した研究がある。そのような研究では、幼児が一見推奨

されないような行為を用いる意義が述べられており、強い身体接触を研究する意義の論考に示唆が得られるものである。

平井・山田<sup>44)</sup>は、相手が肯定的に受け止めてくれることを期待して、親しい相手あるいは親しくなりたい相手に対して、叩く、悪口を言う、撃つ真似をするなどの攻撃行動が用いられることを報告している。しかし、これらの行動にはその行動をしている子どもの表情に微笑を伴う場合が多いとし、親しいものに対して、あるいは、親しくなりたいと望む相手に対して行うことが多いと述べている。

平井・山田と同じく、幼児におけるふざけ行動を研究した堀越<sup>45)</sup>は、ふざけ行動の意義と幼児教育での積極的な位置づけについて検討している。

堀越はふざけ行動の意義として、ふざけ行動は遊戯性を伴い、ポジティブなコミュニケーションを円滑に進めるためのものであり、他者とのトラブルなどのネガティブな状況においては、それに対応する対処方略となっていることをあげている。また、幼児教育での積極的な位置づけとして、幼児の集中・没頭や、集中・没頭することで生じる学びの芽生えや社会情動的スキルの育成を、ふざけ行動が弛緩・発散の一表現として支えていると述べている。加えてふざけ行動は、二面性・両極性の特徴をもち、状況に応じて変容する曖昧性の高い行動であり、状況や行動から意図を読み取って判断するため、幼児にとっても保育者にとってもスキルを高める機会となりうることを指摘している。

このように堀越は、ふざけ行動は幼児にとって意義のある行動であり、同時に保育者にとっても、その行為のもつ意味を考えることを通して、幼児理解のスキルを高められる可能性を述べている。

また牧<sup>46)</sup>は、幼児が冗談で悪口を言う、遊び半分で叩く、ふざけて意地悪をするなど、相手が怒ったり嫌がったりするであろう言動を用いて他者とかかわろうとする行為を「からかい」と呼び、幼児間で用いられるからかいについて研究している。からかい研究の中で、攻撃的な行為としてのからかいは、一見攻撃のように見えるが、遊び・冗談として解釈できる行為として捉えられ、そのような行為は、遊びの文脈や相手との関係性に支えられて、からかい手の遊戯的意図を読み取ったり、肯定的な反応を示したりするなどしてコミュニケーションの手段として用いられることを明らかにしている。

このように、相手に対して攻撃行動やふざけ行為、からかいを用いてかかわることは、第三者からするとネガティブな意味をもつ行為として解釈されることもあるが、相手に対して親しみをもってかかわろうとしたり、コミュニケーションの手段として用いられたり

することがあり、幼児間のかかわりにおいてポジティブな行為として捉えることも可能である。本稿で焦点を当てた強い身体接触も、叩く、押すなどの行為を用いて相手とかかわるものであるが、一見すると攻撃的に見えることもある行為の裏側には、相手とかかわりを期待して用いられるものが存在すると考えられ、そのような行為は保育現場で日常的に散見される。例えばPellegrini,A.D<sup>47)</sup>が、幼児が大人を相手に行うじゃれ合い遊び(R&T)では、叩く、押す、乗りかかるなどの攻撃行動が、遊びの手段として用いられていることを示しているように、幼児間においても同様の強い身体接触がみられる。それだけではなく、思い通りにものごとが進まない場面や、他児に対してかかわりのきっかけを作るような場面においても、強く身体を用いる姿がみられることから、幼児が生活の様々な場面において強い身体接触を積極的に用いていると捉えられる。

## 5. 今後の研究の課題

本稿では、身体接触に関する先行研究を俯瞰し、幼児が叩く、押す、引っ張るなど、強く身体を用いることで他者とかかわろうとする行為を「強い身体接触」と名辞し、強い身体接触に関する用語の整理や、強い身体接触がもたらす効果、コミュニケーションの方略として用いられる可能性について論じた。

先行研究から、幼児間の身体接触について検討する際、身体は単なる他者との皮膚同士の刺激としての接触ではなく、心、脳ともつながって関連し合うものとして捉えることが必要であることがわかった。身体接触とは、身体を用いることにより思いが表現され、身体を使って他者と接触することにより、身体に限らず思考もつながり相手と共有される「社会的な行為」とあると考えられた。従って、言葉だけでは自分の思いや考えを十分に表されない幼児期において、幼児間の身体接触は、他者とかかわりにおいて、重要な役割を担うと考えられる。他者に対して強く身体を用いて接触する行為に着目することは、一見、乱暴に見える行為においても、幼児がどのような思いをもってかかわろうとしているのか、換言すればどのような意味をもって身体でコミュニケーションしようとしているのかを捉えようとするのである。そのため、幼児が用いる強い身体接触が、他者とのコミュニケーションにおいて、どのような役割を担っているのかを検討することには意義があるといえるだろう。

また、強い身体接触には、攻撃的な行為が含まれる。例えば幼児間では、自分の思い通りにならない場面において、他者を押したり、叩いたりする強い身体接触を用いて、自分の感情をぶつけるようにして行為に及



ぶような場面が見られる。そのように、感情のまま行為に及ぶことによって、他者の反発や反感を買うこととなり、自分の思いが他者に正しく伝えられなかったり、他者からも攻撃的な行為を受けたりすることによって、いざこざに発展することが考えられる。幼児間のいざこざは、社会的関係を学習する機会<sup>48)</sup>として捉えられており、強い身体接触を用いる場面においても、同様の機会になることが考えられる。

加えて「強く」身体を用いる行為によって得られる発達の効果も示されていた。筒井ら<sup>31)</sup>によって、小学生による身体接触を伴う運動が、他者への身体への気づきを促し、お互いが主観的に相手の気持ちを認知することによって実感を伴う共感的な心情を生起させ、攻撃的な感情の表出を抑制するという研究結果が示されていた。また、保育者と幼児が強く身体を用いて行う「じゃれつき遊びに」によって、脳の前頭葉が刺激され、興奮と抑制の強さを発達させるという正木ら<sup>32)</sup>の研究からも、強く接触することによる効果が示されていた。このように、他者と強く身体を接触させることによるポジティブな効果が示されているが、これらの研究は、強く身体を用いる活動として、設定された状況下で行われたものであった。先行研究には、生活の中で、他者に対して自分の意思によって強く身体を用いる姿を観察したものは見られない。そのため、幼児間における強い身体接触においても、先行研究と同様のポジティブな効果がみられるのか、検討する必要があるだろう。

他者に対して、自分の思考を伝えるためには、感情をそのまま相手にぶつけるだけでなく、自分の気持ちを抑えたり、自分の行為に対する相手の反応から、自分をコントロールしたりして行為を調整することが必要となる。そのため、他者に対して強い身体接触を用いる場面は、そのような自己を調整する機会となり、そのような行為を繰り返すことによって、自己調整機能が発達する一因となるのではないだろうか。ひいては他者とのかわりを学ぶ機会となるだろう。強い身体接触を用いることは、相手と思いや考えを共有したり、反対に思いがすれ違うことでいざこざを経験したりする機会となることが考えられる。強い身体接触という、言葉ではなく身体を用いて表現する行為を用いることによって、相手の反応から思いを読み取ったり、自分の言動を調整したりすることによって、幼児は他者とのかわりを学ぶだろう。また、強い身体接触が相手に受け入れられることによって、身体を通して直接的に他者と共感したり、共有したりすることとなるため、仲間関係の発展にもつながると考えられる。

以上のことから、実際の保育現場において幼児間で用いられる強い身体接触の実態を把握し、その行為の

もつ役割を検討することは、身体接触研究において重要なことだといえる。幼児期の身体接触をテーマにした研究では、母子間を対象にしたものが多く、また幼児間の身体接触においても「強く」身体を用いる行為に焦点を当てた研究はみられない。そのため、幼児間における強い身体接触を検討することによって、幼児に対する理解を深めることにつながるような研究をしたい。

#### 引用・参考文献

- 1) 大淵憲一 (1987) 攻撃の動機と対人機能. 心理学研究. 58-2. 113-124
- 2) Pellegrini, A.D. & Smith, P.K. (1998) *Physical Activity Play: The Nature and Function of a Neglected Aspect of play*. Child Development. 69. 577-598
- 3) 越中康治・新見直子・淡野将太・松田由希子・前田健一 (2007) 攻撃行動に対する幼児の善悪判断に及ぼす動機と目的の影響. 広島大学大学院教育学研究科紀要. 3-56. 319-323
- 4) 木下芳子・斉藤こずゑ・朝生あけみ (1986) 幼児期の仲間同士の相互交渉と社会的能力の発達—3歳児におけるいざこざの発生と解決—. 埼玉大学紀要. 35. 1-15
- 5) 無藤隆・内田伸子・斉藤こずゑ (1986) 子ども時代を豊かに—新しい保育心理学—. 学文社. 89-110
- 6) デジタル大辞泉. からだ  
<https://www.weblio.jp/content/%E3%81%8B%E3%82%89%E3%81%A0> (情報取得 2021/07/20)
- 7) デカルト (1967) 野田又夫 (編). 中央公論社. 296
- 8) メルロ＝ポンティ (1967) 知覚の現象学 I (竹内芳郎・小木貞孝, 訳). みすず書房. 160-171. (Merleau-Ponty, M. (1945). *PHÉNOMÉNOLOGIE DE LA PERCEPTION*. Editions Gallimard)
- 9) ジェームズ, W. (1993) 心理学<下> (今田寛, 訳). 岩波書店. 204-205.  
(James, W. (1984). *Psychology; Briefer Course*. Harvard University Press)
- 10) 春木豊 (2011) 動きが心をつくる—身体心理学への招待—. 講談社現代新書. 70-78. 143-152
- 11) 養老孟司 (1989) 唯脳論. 青土社. 13. 29-56
- 12) 山口創 (2004) 子供の「脳」は肌にある. 光文社. 10-24
- 13) 茂木健一郎 (2013) 創造する脳. PHP 研究所. 68-72
- 14) 鷺田清一 (1998) 悲鳴を上げる身体. PHP 研究所. 54-55
- 15) 津守真 (1997) 保育者の地平—私的体験から普遍に向けて—. ミネルヴァ書房. 96

- 16) 諏訪正樹 (2012) “からだで学ぶ” ことの意味ー学び・教育における身体性ー. *Keio SFC journal*. 12. 2. 9-18
- 17) 渡辺富夫 (2005) 身体的コミュニケーション技術とその応用. *システム/制御/情報*. 49. 11. 431-436
- 18) 無藤隆 (1997) 協同するからだとことばー幼児の相互作用の質的分析ー. 金子書房. 10
- 19) 相越麻里 (2009) 身体接触の臨床心理学的効果と青年期の愛着スタイルとの関連. 岩手大学大学院人文社会学研究科紀要. 18. 1-18
- 20) 大坊郁夫 (1998) しぐさのコミュニケーションー人は親しみをどう伝えあうかー. サイエンス社. 47-49
- 21) ハーロウ (1978) 愛のなりたち (浜田寿美男, 訳). ミネルヴァ書房. 12. 34-41  
(Harlow, H.F. (1971). *LEARNING TO LOVE*. Albion publishing Company)
- 22) ボウルビィ, J. (1976) 母子関係の理論 愛着行動 (黒田実郎・大羽葵・岡田洋子, 訳). 岩崎学術出版社. 235  
(Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss, Vol.1 Attachment*. Hogarth Press)
- 23) 根ヶ山光一 (2012) 発達科学ハンドブック第4巻 発達の基盤: 身体, 認知, 情動 第9章 対人関係の基盤としての身体接触. 119-129
- 24) A・モンタギュー (1971) タッチング・親と子のふれあい (佐藤信行・佐藤方代, 共訳). 平凡社. 184-219
- 25) 山口創 (2004) 子供の「脳」は肌にある. 光文社. 34-53
- 26) 山口創・山本晴義・春木豊 (2000) 両親から受けた身体接触と心理的不適応との関連. *健康心理学研究*. 13. 19-28
- 27) 山口創 (2010) 身体接触が不安に及ぼす影響: 触覚抵抗との関連. 桜美林論考. 心理・教育学研究. 1. 123-132
- 28) 川島みどり (2007) 看護を語ることの意味: “ナラティブ” に生きて. 看護の科学社. 147-158
- 29) 宮島直子 (1998) 看護におけるコミュニケーション・チャンネルの研究: 検査場面での身体接触の効果. 北海道大学医療技術短期大学部紀要. 11. 37-48
- 30) 松尾香弥子 (1994) 親愛感の知覚における視覚・聴覚・触覚の間の優先関係. *社会心理学研究*. 10. 64-74
- 31) 筒井茂樹・角山依絵・中本穂乃香・後藤幸弘 (2014) 身体接触を伴う運動「組ずもう」「カバディ」の教育的効果についてー「筋出力の制御力」「重量弁別能力」「二点識別能力」でみた体性感覚を中心にー. 兵庫教育大研究紀要. 45. 147-154
- 32) 正木健雄・井上高光・野尻ヒデ (2004) 脳を鍛える「じゃれつき遊び」. 小学館. 12-34
- 33) 前掲 20. 47-49
- 34) 西洋子 (2002) 身体によるインタラクティブなコミュニケーションー身体表現の“現場での実践”と“研究”の統合を目指してー. 博士論文. 神戸大学. 神戸. 12-14
- 35) 最新心理学辞典. コミュニケーション.  
<https://kotobank.jp/word/%E3%82%B3%E3%83%9F%E3%83%A5%E3%83%8B%E3%82%B1%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%B3-66186> (情報取得 2021/07/20)
- 36) M.L.パターソン (1995) 非言語コミュニケーションの基礎理論 (工藤力, 訳). 誠信書房. 3-17.  
(Patterson, M.L. (1983). *Nonverbal Behavior A Functional Perspective*. Spring-Verlag New York Inc)
- 37) 鯨岡峻・鯨岡和子 (2001) 保育を支える発達心理学 関係発達保育論入門. ミネルヴァ書房. 184
- 38) 菅原和孝・野村雅一 (1996) コミュニケーションとしての身体 大修館書店. 246-249
- 39) 根ヶ山光一 (2002) 発達行動学の視座 <個>の自立発達の人間科学的研究. 金子書房. 44-52
- 40) 前掲 34. 12-14
- 41) 無藤隆 (1997) 協同するからだとことばー幼児の相互作用の質的分析ー. 金子書房. 15-27
- 42) 塚崎京子・無藤隆 (2004) 保育現場における3歳児の身体接触の変容. *乳幼児教育学研究*. 13. 13-25
- 43) 藤田清澄 (2011) 遊びの中で見られる幼児の身体接触の意味ー身体知の視点からー. *保育学研究*. 49. 29-39
- 44) 平井信義・山田まり子 (1989) 子どものユーモア: おどけ・ふざけの心理. 創元社. 135-142
- 45) 堀越紀香 (2016) 幼児における「ふざけ行動」の意義. 博士論文. 白梅学園大学. 東京. 122
- 46) 牧亮太 (2011) 幼児の遊びにおけるからかいの機能. *保育学研究*. 39. 30-40
- 47) 前掲 2. 577-598
- 48) 本郷一夫 (1994) 子ども間のトラブルに対する保母の働きかけと意図に関する研究ートラブルの内容に基づく保母の対応の違いと個人差を中心にー. 鳴門教育大研究紀要 (教育科学編) 9. 261-274